東京２０４４

mimi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東京２０４４

【Ｎコード】
Ｎ０４０９Ｚ

【作者名】
ｍｉｍｉ

【あらすじ】
金持ちから依頼を受けて、探偵まがいの仕事をしているセナ１８歳。
彼女が東京で出会う様々な人間模様。

BLUE

２０４４年、トーキョー。

古びた高層マンションの最上階。

冷たい感じのするその部屋は、夜が訪れる直前のブルーに包まれて、更に冷たさを増していた。

「セラ」

ベットの中の男に名を呼ばれ、紺とグレーのまだら模様の空を、ぼんやりと見つめていた少女が振り向く。

空の色も映しそうなほど白い肌。ふわりとした黒い髪。人形のように黒目がちな目。

寒いだろ、男はそう声をかけようとしたが、はっとしてやめた。

天使のような外見に、考えている事を悟らせないような小悪魔な内面が魅力の彼女だったが、今はいつもとどうも様子が違う。

男を見つめるその目は、悲しみに沈んでいた。

それも、感情的なものというよりは、諦めといったほうがしっくりくるような具合だ。

男がその意味を計り損ねていると、ドアの外でバタバタと誰かが走る音が聞こえた。

不吉な予感を、男は理論的な思考で打ち消そうとする。

そんな筈はない、咲は今日は旅行の筈だ、ここにいるはずはない。

しかしその考えも、ドアのカギを慌ただしく空ける音でむなしく打ち砕かれた。

「マサト！！」

女の、上等な赤いコートに包まれた肩が、激しく上下している。

寒くなってきた外の外気のせいか目を見開いたままだったせいか、血走った女の目が、ベットの上の半裸の男と、その傍らに佇むセラを見る。

黒い下着しか身につけていなかったセラは、椅子の背にかけておいた網タイツをはきだす。

その落ち着いた様子が、まるで“私はあなたとは違うのよ”といっているようで、女の神経はさらに逆なでされる。

絶望した女は、バックから、護身用の小さめのナイフを取り出した。

そのナイフを発作的に自分の手首にあてがう。

男とセラの目は女に向けられ、男はなにか言葉を発しようとした。

しかし男が言葉を発する前に、女はナイフを自分にあてがうのをやめ、男を睨みながら、男の方に向かって突進してきた。

セラはその様子を横目で見ながら、急いで洋服を身につけると、はだしのまま部屋を駆けだした。

それに気づいた女が、今度はなにやら叫びながらセラを追ってくる。

セラは下の階にいるエレベーターに悪態をつきながら、非常階段のドアを乱暴に開けた。

半狂乱の女なら、当然非常階段を追ってくると思っていたが、以外にも背後でかちりという鍵をかける音がして、セナははっとした。

以外に冷静じゃない、エレベーターで先回りして、下から追ってくるつもりなのかしら、セナは思った。

エレベーターの動向を見ようと、一階下の非常階段のドアを開けようとしてぞっとした。

鍵がかかっている。

さらにもう一階下も同じだった。

「このマンションは私のものだから」

咲という女は、ゆっくりと階段を上がって来る。

その顔に、勝ち誇ったような敗北に歪んだようないびつな表情を浮かべながら。

セラは女の歩みに合せてゆっくりとおいつめられてゆく。

「いいバッグね」

「は？」

「コートもすてき」

セナはなるべく脅えが顔に出ないように注意して続ける。

「そのバックとコートがあればあんな男いらないわよ」

咲は生涯最高の大声を出そうと大きく息を吸いこんだ。

「おまえには関係ねぇだろオォォォォ」

ナイフを持った手を大きく振りかぶった次の瞬間、咲の後ろに人影が現れた。

背後からの素早く鋭い一撃で、咲は何が起こったかも理解できないままその場に倒れこんだ。

「危なかったな」

「遅いわよ、令人」

レトロカー・レディN

夜に染まりかけた冬の寒空の下。

トーキョーの街を切り刻むように張り巡らされた高速を走る、レトロカー、レディ・N。

薄藤色(うすふじいろ)のその車体は、緑のロード・ライトに染まりながら、周りの車をどんどん追い超してゆく。

セラは助手席で体育座りのまま、事務所との連絡用のデバイスを弄んでいる。

さっきまでの自身に満ち溢れたいい女の演技をやめて素の自分に戻ったセナに、網タイツに黒いマイクロミニのドレスといういでたちは、何か違和感を感じさせる。

横でハンドルをにぎる令人は、いわばセラの用心棒だ。

セラをいざという時は身を捨ててでも危険から守る、その役目を令人は実によくこなした。

「東レアルの副社長の娘とヒモ男を別れさせる任務、終了しましたって報告しとくね」

セナは膝の上にデバイスを抱えなおすと、慣れた手つきでそれを操作する。

「次の仕事は、連続強盗の手掛かりを掴む」

「手掛かりを掴むって、強盗なんだからとっ捕まえたら駄目なの？」
低い落ち着いた声でそう言うと、令人は車に備え付けられた小さな灰皿に煙草の灰を落とす。
車は、令人がよそ見をして僅かにずれた軌道を自動で修正する。
「うん、調べて報告書を作成って書いてある」
ふーん、令は面白くなさそうに相槌をうつ。
「あっ、でも見て超きれい」
そういうとセラは画像を見せる為にデバイスを令人の方に向ける。
「どれどれ」
そこに映し出された、彫の深い端正に整った顔立ちの女性の画像を見ようと、令人が身を乗り出す。
その瞬間を狙って、セナが令人のくわえていた煙草をぱっと取り上げ、窓から放り投げた。
「あってめェふざけんなよっ」
「だって未成年でしょ」
腕を組み憮然とした態度をとるセナを、令人はさらに汚い言葉で罵る。

そのオーバーリアクションな態度に、セナは何か感じたようだ。
令人の左の胸ポケットから、素早く煙草の箱を取りさる。
その煙草の箱には、日本語でも英語でもない文字がびっしり書かれている。
成分の書かれた場所を探していると、令人が箱を奪い返した。
「おかしいと思ってたのよ、給料は一緒の筈なのに令人はいつもお金ないし」
セナが心底悔しそうな顔をする。
「こんな所にお金使ってたなんて」
令人はセナの苦しそうな横顔を見て、どうするべきか迷った。
「まぁそんなに怒んなよ」
しかしセナが不意打ちをかけ箱を奪おうとすると、それを鮮やかに片手で制した。
セナはさらにむきになる。
「やめなさいよ！薬（ヤク）入りのタバコなんか！！」
「おっちょっおまえ危ねぇだろ！！」

レトロカーの中はセナのマンションに着くまで、戦場と化した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0409z/

東京２０４４

2011年12月29日14時47分発行